

松本清張記念館

◆館報◆
2006. 4
第21号

忍びやかなノックはつづいた。

ここはカイロの深夜であった。



「砂漠の塩」は、「婦人公論」に昭和四十年九月号から昭和四十一年十一月号まで連載された。

現在入手できる本

松本清張全集第19巻(文藝春秋)

「砂漠の塩」新潮文庫(新潮社)

「松本清張セレクション11」(中央公論社)

『砂漠の塩』昭和42年3月発行 中央公論社

目次

- 講演「松本清張と大和の国際化」……………2
- 企画展紹介「松本清張文学と中近東」……………4
- 展示品紹介……………5
- 清張原風景「点描」……………5
- 研究誌「松本清張研究」第七号発行……………6
- 探検！清張記念館……………6
- 友の会活動報告……………7
- みんなの広場……………7
- トピックス……………8

作品紹介

野木泰子は旅行社が募集したツアーに加わり、羽田を飛び立った。パリ、ロンドン、ジュネーブ、ローマ、アテネ、カイロ、香港をまわり帰国する予定であった。空港では夫の保雄が見送った。会社を辞めることは決めていた。香港に着くと一方的に辞表を本社に郵送し、カイロに向った。

泰子はハンブルクで、急遽予定を変えドイツに行くことを理由にツアーから抜けた。実際に泰子に向った先は真吉の待つカイロであった。全て予定の行動であった。お互いに夫と妻を裏切った泰子と真吉は、永遠に死体の見られないところで、二人ひっそりと死ぬことにしていた。

二人の計画が狂ったのもカイロだった。宿泊先のホテルで、同じ部屋に入るところを保雄の同僚に見られたのだ。二人は慌しくカイロを発ち、レバノン、ダマスカスを經由して砂漠地帯に入って行った。最後の計画を実行するためである。

同僚からカイロでの出来事を聞いた保雄は、泰子を追った。綻びはじめた泰子と真吉の計画が大きな悲劇となっていく。

松本清張が四度訪れた中近東の砂漠地帯を背景に、パールベックなどの遺跡を織り交ぜながら描いた恋愛小説である。

(中野 吉明)

「松本清張と大和の国際化」

平成18年2月25日(土)
小倉リーセントホテル

企画展『松本清張文学と中近東——小説に読む考古学』の開催を記念し、清張古代史をテーマとした講演会を催しました。

清張の古代への関心

松本先生は「承知のように作家なんですけども、非常に古代や考古学に興味をもたれていた。そして、自分の作品と考古学との関係を、『清張通史』の「邪馬台国」のなかに書いています。『日本書紀』や『古事記』などの文献の方を見ると、空白が多い。点と点だけだ。その点と点を結ぶ、その空白を埋めるのは推理によるしかない。その歴史上の推理を松本先生は「史眼」、「歴史の眼」という言葉で表現している。推理といっても納得のいく説明、論証が必要であって、論証に役立つ空白を埋めるのが考古学であると言われる。なるほど松本先生の作品は、そういう「史眼」でお書きになったんだなあとと思う。『ヘルセポリスから飛鳥へ』などは、私もイランを調査するときに読みました。我々が考えようと思ったことをすでに松本先生はほとんど書いておられ、我々はそれを後で実際の現地を巡って確認した。やはり「推理」、「史眼」が優れていたんだなあと痛感しております。

考古学は、「推理」を実はあまりやらないのです。考古学者は「事実」をまず追究する。それが一番最初の仕事で、その「事実」の中にある「真理」を追究するのが、私たちのやり方なんです。それを中国では、「実事求是」と言います。私の信念の一つです。

イランとの関係でいうと、学者としては京都大学の言語の先生で、イラン語の古典の研究者の、

伊藤義教先生という方が、当時イランから渡来人がやってきて早く飛鳥の檜隈(ひのくま)というところに住み着いて、それを蘇我馬子、蝦夷の家がうまく利用して、ああいいう明日香村のいろんな珍しいものを造ったんだと言っている。『日本書紀』などに書かれている渡来人の名前がイラン語に適用できると学問的に証明している。私は伊藤さんの説がむしろ先で、それを松本さんがお読みになったのかなと思っていたら、そうじゃないんですね。伊藤さんの論文よりも松本さんの『ヘルセポリスから飛鳥へ』の方が二年ぐらい早い。ということ、松本さんが早くにイランとの関係を認識されたのかなと思っております。

飛鳥の石造物

飛鳥の謎の石造遺物の一つに須弥山石があります。これは四つの石が縦に積まれ、全体、山の山脈のような形をしており、噴水施設です。特に外国から来たお客さんを招待する場として、庭を造り、おそらく池の畔に「こつ」いうものをたくさん作って置いたのではないかと言われています。

男女石人像は、年寄りの男女がお互いに抱き合っています。日本の昔の彫刻にはこんなユニークなものはない。これも噴水なんです。二つの像をうなぎ合わせの彫刻はとも日本本来の作品ではない。渡来人が造ったのであろうと言われていんです。

のか解明できない。この猿石に松本さんは注目しました。猿石の一つに「女」の像がありますが、どういうわけかその裏側にも顔が彫つてあります。鳥のような、大きな嘴を持っています。で、目と角があつて、羽根がある。怪獣か怪鳥か。

これが実は、法隆寺の金堂の中の釈迦三尊像の上にある天蓋に飾りがあつて、その顔のこの嘴、この辺がさっきのとよく似ていると松本さんは気づかれた。で、この元は何だろうと松本さんは追究されて、ヘルセポリスに行った。ヘルセポリスの柱の上に、角を生やして鳥の大きな嘴をもった、目玉をもった、こういう怪獣か怪鳥が背中合わせにある。これが元なんだと言われる。グリフォンという驚なんです。そのスタイルをイランからの渡来人が日本にやってきて造ったのが、猿石の「女」の像の反対側にあつた像であり、法隆寺の鳳凰の模様もこれからきたんだろうと言っているのです。

とにかく飛鳥の石造物の中に背中合わせの像が非常に多いと注目された。イランに行ってみると、イスファハンに「チヘルソートン」という宮殿がある。宮殿の前にきれいな庭があり、四角い池があつてその四隅に、女神がライオンの首を抱えている柱が立っているんです。女神の像が四つある、四角の柱の裏側にも左右にも。これも噴水の設備なんです。それから、宮殿の入口の木造の建物の柱の礎石がある。ライオンのような顔が四角い柱ですから、四隅に背中合わせで彫刻されている。これも松本さんはちゃんとご覧になって、「こつ」だったイランの背中合わせの像が飛鳥のあの石造物の原

点にならなうと云われているのです。優れた「史眼」によってそういうものを推理して、納得のいく説明をきちんとされる。

明日香村の有名な酒船石ですけども、表面に浅い穴があつて、溝を水が流れていくようになっていたんですね。しかし、実際に水を流してみたら、両側に残っている穴には入らない。これは何か。松本さんはイランのゾロアスター教の、ハオマというお酒を造る道具だと言われる。ハオマというのはいろんな香薬、香のする植物を集めてきて、そしてそれを水に溶かしてハオマというのを造る。だから、素材になる香料を水が入らない皿のようなところに置いておいたんだ。そして、それをうまく調査して水で造ったのがハオマ酒だろう。そのための道具だと言われるんですね。まだそれが事実かどうかは証明できてませんが、松本さん独特の解釈をちゃんとやっつてらうとすると、これが参考になると思っております。

最近、明日香村で新しく発見されました石造物です。一番上の所が井戸です。そこから水が流れて、「この形が亀の形をしている。頭があつて、お尻の方へ水が流れてくる。水の祭をする、水の行事をする施設だろう」というところまでは分かっているんです。その亀の形が天寿国繡帳の中に出てくる亀に似ている。穴穂部間人皇女あなほのはしひとのひめみこが、聖徳太子が亡くなられたときに「これを作ったが、そのときに、東漢末賢というイランから来た工人に下書きをさせたと言われているので、イラン系の人がまず作ったそういうスタイルのもの

のがあめい亀形の石造物にもなつていったんだらう。この石造物は松本さんが亡くなった後に出てきてますから、これは新しく私なんか考えていることですが、飛鳥時代に渡来人がたくさんやってきて、日本になつたようないろんなものを作つたという点では、一つの貴重な資料になるんじゃないかと思ひます。

飛鳥の渡来人

飛鳥の檜隈という土地は昔、渡来人がきて大集団を作つておりました。それは、東漢氏あずまのあやのうじ。朝鮮系の人たちだろうとの考え方が非常に多い。ところが、『日本書紀』や『続日本書紀』によると、倭漢直(やまとのあやのあたじ)の祖先である阿知使主(あちのおみぬし)、「この「あちのおみぬし」という言葉がちゃんとイラン語で読めると言われる

んですね。この阿知使主が東漢の、後漢の靈帝の曾孫であつて、十七歳の人たちを連れて日本にやってきて帰化して、この檜隈の地に住みついたら、『日本書紀』に書かれてある。イランの人も中国や朝鮮を通じて来て、最後は日本にまで渡ってきたんじゃないだろうか。さっきの天寿国繡帳の下絵を描いたのは、「この東漢末賢という人物である。この末賢もイラン語に訳すことが出来る。それから、敏達天皇のときに渡来した司馬達等。それから、路子工、二二という者も皆ヘルシア人であると、今はイラン語の専門家の人が実際に考証しておられるんですね。松本さんが推理したものを、学者の方が

証明するという結果がある程度出てきている。

それから、正倉院の白瑠璃碗、これについても松本さんは言っておられます。カットグラスで、丸い切子があつてそれが装飾になっている。で、こういうものが安閑天皇陵からも出ておりますし、確か松本さんも——私、松本さんの東京のお家に行つたときに見せてもらった記憶がありますけれども、まあ、イラン系のものであるとは昔から有名なことです。松本さんが注目しているのは、「この一番底の所の部分ですね。真ん中に円のカットがあつて、その周りに七個の円で囲つてあるんですね。この七という数字が実は聖なる数字であると松本さんは言っている。バビロニアやイランなんかでも聖なる七という数字が使われていると松本さんは強調しておられる。

今日お話ししたのは、松本清張が「史眼」によっていろんな優れた推理をした。それを考古学の事実で確かめようとした。私たちは実物を見てそれで真実を追究していく。その違いはあるが、「史眼」というか推理というか、そういうものが非常に役に立って、学問の研究を大いに促進させるということ、私は松本さんから教えられた。松本さんが生きておられたら、最近、考古学の世界で発見されている資料に対しても、何か仰つただろうと思ひますよ。残念ながら、今日では日本人の考えは分からないけども、我々は松本さんの「史眼」を大切に、見習つてやっつていくと、また新しい一つの世界が開けるかなあというふうな印象を持っております。



樋口 隆康

■プロフィール

文学博士。京都大学名誉教授。(財)泉屋博古館館長。

奈良県立橿原考古学研究所所長。(財)シルクロード学研究中心一室長。

1919年、福岡県添田町生まれ。1943年、京都帝国大学文学部史学科卒業。

1945年、同大学院修了。NHK放送文化賞、朝日賞受賞。

主な著書に、『日本人はどこから来たか』『パーミヤンの石窟』『ガンダーラへの道』

『シルクロードを掘る』『始皇帝を掘る』『三角縁神獣鏡新鑑』『アフガニスタン 遺跡と

秘宝～文明の十字路の五千年』などがある。

『松本清張文学と中近東』 ——小説に読む考古学』

特別企画展『松本清張文学と中近東——小説に読む考古学』は清張文学における「考古学もの」、「古代史もの」に光を当てた企画展ですが、好評につき、五月七日(日)まで延長開催します。

まだ「覧頂いていない方のために、清張が作品中に多彩に活用している、考古学遺物や美術工芸品などの展示品のいくつかを紹介します。



天体観測儀Ⅱアストロラーベ
真鍮 イラン 19世紀



女神水文注
銀 イラン 5〜7世紀



加曾利E式土器(小型深鉢)
山梨県上野原遺跡 縄文時代中期



加曾利E式・曾利式折衷土器
神奈川県川尻遺跡 縄文時代中期

千葉県千葉市桜木町加曾利貝塚E地点出土

天体の高度を観測して経緯度と方位角を測定する器械。作品『**ペルシアの測天儀**』では、「円形の金属製品で、真ん中に円形の線が二重に回っていて、それぞれに目盛り」の刻みを見て、「星の高低と角度とを測定する」と説明している。「上に紐を通して吊るような」環がついていると描かれているが、作品のそれはミニチュアの土産物なので「小さな」環となつているが、実際にその環に紐などを通して吊して観測に使用したようである。

ササン朝ペルシア時代に作られたと思われる、銀製の水差しである。孔雀などの鳥やロータスの文様の間に、四体の裸身の女神像がマフカスのような楽器(?)を振りながら踊っている。ササン朝ペルシアの時代はゾロアスター教が国教で、**ゾロアスター教**は多神教であった。善神(アフラマズダ)や悪神(アーリマン)のほかに、水をつかさどる女神アナナーヒターなどがあり、水差しの表面に描かれていることも考えて、この裸身の女神はアナナーヒター神とも考えられる。

千葉県千葉市桜木町加曾利貝塚E地点出土遺物を標識とする、縄文時代中期の土器。「**万葉翡翠**」という作品に登場する。石斧や石匙や土器の破片を詰めこみ積み上げられた箱とともに、「去年の夏休みの発掘調査で得た加曾利E式の大きな深鉢型土器が復元されたばかりで置かれていたと、ある助教教授の考古学研究室の雑然とした空気の中かで異彩を放つ様子がよく出ている。

西郷札

明治十年（一八七七）、西南戦争の際資金に窮した西郷軍は、軍費調達のために紙幣を発行した。敗勢となつた西郷軍が強制力を持つて使用したため、「西郷札」を押し付けられた商店などは、政府軍の勝利によって多大な被害を出したという。

松本清張はこの「西郷札」の存在を、勤務先の朝日新聞西部本社で見

た百科事典によって知る。この百科事典、正確には「富山房」発行の『國民百科大辞典』で、作品にも引用されており、引用の箇所は実際の記述とほぼ違わない。清張は（図案の仕事で新聞社の百科事典を見ていたら、面白い話なので仕事の調べは中断して



読んだ」（『文学の森歴史の海※1』）、「事典のこの解説は、西南戦争後のインフレにもふれていたもので、現在の世相に似ていると思ひ、西郷札を買い占めて一儲けを企らむヤミ商人的な人間を配したら面白い筋になりそうだと思つた」（『西郷札のころ※2』）と書いている。確かに富山房発行『國民百科大辞典』の「西郷札」の解説文は、「どことなく講談めいて物語性を感じさせる。

「西郷札」には、十円（淡黄色）、五円（ねずみ色）、一元（浅黒色）、五十銭（淡黄色）、二十銭（黄色）、十銭（藍色）の六種があり、紙の表裏に寒冷紗という布を張り合わせてある。造幣は、小説の主人公の出生地でもある日向国佐土原の広瀬にある瓢箪島で行われた。当館に展示している「西郷札」はこのうち五円札。清張の所蔵品だったが、いつ頃どのように入手したかは不明である。五円の西郷札と並んで右側に収まっているのは「承恵社札」というもので、やはり西郷軍が軍費調達のために、士族商社から発行した戦時証券という。

執筆時の世相に重ねて書かれた「西郷札」、マネーゲームの悲喜劇はいつの世も同じのようだ。

（学芸員 柳原 暁子）

- ※1 読売新聞夕刊 一九九〇・十一月十三日
- ※2 週刊朝日増刊 一九四六・四・五日

参考文献①『国史大辞典』（吉川弘文館）、「宮崎県大百科事典」（宮崎日日新聞社）、「宮崎県史」（宮崎県）
協力：宮崎県立総合博物館

清張原風景 点描

天神島小学校



「私は、小学校をvari、天神島小学校の五年生だった。（『半生の記』）一家は下関を去り、小倉に移った。清張が通う小学校も、下関の菁莪尋常小学校から小倉の天神島尋常小学校にかわつた。

小学校の横には神嶽川が流れ、菅原神社があつた。家から歩いてわずかな距離である。

小倉に移つても父親の仕事は不安定だった。近くの市場の魚屋から塩鮭と塩鱈を分けてもらい、天神島橋の上立つて売っていたこともあつた。

「学校の帰りにはこの橋を渡らねばならず、いっしょに連れ立つ友だちの手前、檻樓にくるまった父の姿がさすがに恥し



天神島小学校跡石碑

かつた。（『骨壺の風景』）
天神島尋常小学校は、明治四十四年開校。昭和四十三年堺町小学校と統合され小倉小学校となつた（現在、小倉小学校はさらに米町小学校と統合され、小倉中央小学校になっている）。跡地には商工貿易会館が立つている。
統合により廃校となる天神島小学校ではその年、記念誌『天神島』を発行した。清張は「木綿緋の絵」と題するエッセーを寄せ、思い出を綴つた。
「天神島学校の裏は天神さまで、石の反り橋が池にかかり、鳩がいっばい群れていた。（中略）五月になると池にアヤマゲが咲く。それが二階の教室の窓から見下せる。一方の窓からは神嶽川を上下する底の平たい川舟を見おろす。材木のイカダも通る。校庭がせまいだけに、こんな景色が窓に接していた。その窓の中には、緋の着物に袴をつけた六年生の私が座っている。／四十六・七年の昔である。だが思い出はときれとぎれながらも少しも色褪せていない。世の中の埃を吸わなかつたなつかしい時期である。もう、ああいこうころは二度とかえってこない。（中野 吉明）

研究誌『松本清張研究』第七号発行

定価二〇〇〇円



年一回発行の『松本清張研究』の今回の特集は「歴史・時代小説の醍醐味」です。

清張は「西郷札」でのデビューにはじまり、晩年まで、多くの歴史・時代小説を遺しました。今号では、第一線で活躍する研究者による論文のほか、作家の阿刀田高氏と山本一力氏による対談や、現在活躍中の作家の皆さんにエッセイを寄せて頂くなど、内容も盛りだくさんです。

巻頭 岡本綺堂と清張先生

特集 歴史・時代小説の醍醐味

特別対談 清張さんの横顔

『天保図録』ノート

二つの日本合戦譚——菊池寛松本清張——

消えた「なかま」のゆくえ

江戸の〈切絵図〉と〈噂〉——捕物帳清張——

対談 短編の緊密さ、長編の構想力

清張賞作家エッセイ特集

「北海道談綺」を解く

絢爛たる策謀の果て

無宿者に寄せる哀歎

史実の背後

「低いところ」の視点

闇の領分

無宿のこと

暗い話の効用

西洋的な伝奇小説の試み

〈再録〉「天保図録」編外 閑筆遊歩

清張歴史時代小説——関連作品目録関連記事目録

記念館研究ノート

古代史家との往復書簡にみる、「火の路」高須論文の創作過程(一)

古代史・考古学への目覚め——暫新聞社時代の松本清張——

阿刀田高 山本一力

野口武彦

石川 巧

高橋敏夫

山田有策

寺田 博十 中島 誠

山本音也

森福 都

葉治英哉

山本兼一

三咲光郎

明野照葉

城野 隆

岩井三四二

島村 匠

松本清張

佐藤芳子 柳原暁子 編

中川里志

小野芳美

老よしとハルコの探検! 清張記念館

IF “松本清張全仕事「フィルモグラフィ」”の巻

きよし 清張作品って昔から映画やドラマになってるんだね。

ハルコ 最初に映画化されたのが昭和32年というから、デビューして4年しか経ってない! 当時、映画産業が活気があって制作本数が多かったことを差し引いてもすごいことね。

きよし そしてこんなにも長く愛されているんだもの、作品の持つ力をあらためて感じずにはいられない。この短い紹介フィルムを見ているだけでも本編を見たくなったよ。

ハルコ 企画展の開催されていないときには企画展示室でビデオ上映会が行われていたりするから要チェックね。

ハルコ あ、これはメイキング映像ね。撮影に立ち会って台本をチェックしている。執筆だけでもすごく忙しいはずなのに、自分の作品に決して妥協しないのねえ。さすが。



きよし あ、そろそろ映像も終わるみたいだよ。

ハルコ そうね。つて、え〜!! 最後の映画のワンシーンに出てきた人、清張本人よ。

きよし 本当だ。これも妥協を許さない清張だからだな。

ハルコ …いや、それはちょっと違うと思うわよ。

作品の雰囲気伝わってくる当時の映像や台本の数々。銀幕のスターから、現在でも活躍している俳優の若いころの姿まで見ることができるのも楽しみです(最後にお遍路姿のチョイ役で登場する清張のお宝映像?付き)。松本清張全仕事「フィルモグラフィ」は「推理劇場」手前です。

みんなの広場

今回は、最近お寄せいただいたアンケートの中から、記念館を訪れての感想を掲載しました。

- ・展示もすばらしいし、松本清張氏の生き様も垣間見れてとても良かった。清張さんの小説が大好きで若い頃からの大ファンでしたので、とてもうれしかったです。
(50代・長崎・女)
- ・近くに住んでいるのに一度も来たことがありませんでした。松本清張の本をあまり読んだことがなくそんなに興味がなかったのですが、もっと松本清張のことを知りたい、本を読もう!と思いました。
(20代・市内・女)
- ・松本清張の住んでいた家を再現しているのがリアルで良かったです。想像しやすかったです。静かな空間でゆっくり松本清張の世界を味わうことができました。
(20代・福岡・女)

- ・建物がとても立派だった。松本清張の生涯が、分かりやすく迎えることができた。もう一度(作品を)読んでみようと思った。
(50代・福岡・女)
- ・清張に興味がない人でも楽しめ、清張が好きな人なら尚楽しめると思う。また来館したい。
(20代・山口・女)

このコーナーでは、アンケートなどでお寄せいただいた意見等をご紹介します。清張や作品に対する思い、エピソードなど何でも結構です。皆さんの「声」を是非、記念館までお寄せください。
※アンケートは館内にも置いてあります。

友の会 活動報告

● 松本清張生誕祭(12月21日(水):参加者40名)

松本清張の誕生日にちなみ一昨年から始めた生誕祭ですが、今回は映画評論家の西村雄一郎氏を講師にお迎えし、講演会を開催しました。

清張原作の映画に関するエピソードなどが紹介され、聴衆も熱心に聞き入っていました。



● 第10回清張サロン(3月23日(木):参加者25名)

北九州市立大学教授赤塚正幸先生を講師にお迎えして、「万葉翡翠」をテーマに清張サロンを行いました。作品のポイント、伏線や仕掛けの巧みさなどの解説が行われ、開催中の企画展「松本清張文学と中近東——小説に読む考古学」と関連のあるテーマということもあり、参加者も多く盛況でした。サロン終了後は、記念館学芸員の案内で企画展を見学しました。



友の会会員募集!!

ただいま松本清張記念館友の会では新規会員を募集中です。友の会では清張ゆかりの地の見学や読書会・講演会等の開催、会報の発行など多彩な事業を展開しています。

会費は、8月から翌年7月までの1年間で会費3,000円となっております。

■友の会事業

- ・講演会・シンポジウム等の開催
- ・映画ビデオ等の上映会の開催
- ・読書会・文芸講座等の開催
- ・会報の発行
- ・松本清張ゆかりの地、他都市の文学館見学事業の実施 など

■会員特典

- ・常設展の招待券(年間4枚)進呈
- ・友の会主催事業のご案内、会報の進呈
- ・企画展(年2回)のご招待
- ・友の会オリジナルグッズの進呈(加入年度のみ)
- ・記念館主催事業のご案内・参加
- ・喫茶「石の館」(記念館内)の飲食料金1割引
- ・記念館広報誌(館報)・企画展図録の進呈

友の会入会のお申し込みは… TEL. 093-582-2761 松本清張記念館友の会事務局まで

平成18年度 中学生・高校生

読書感想文 コンクール

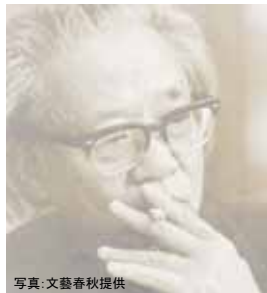


写真:文藝春秋提供

昨年に引き続き、清張作品の読書感想文を、中学生・高校生を対象に募集します。

若年層に、より多くの作品に親しんで欲しい、表現力を学び豊かな心を身に付けてもらいたいという願いから、このコンクールは始まりました。そして、これからの担う若者たちに、探求の人・松本清張の精神が伝えられていけば幸いです。

■応募対象 全国の中学生・高校生

■課題図書 中学生・高校生ともに下記から1作品

「**眼の壁**」(新潮文庫)

「**西郷札**」(新潮文庫『西郷札』・

文春文庫宮部みゆき責任編集 松本清張コレクション傑作篇』下)

「**陸行水行**」(新潮文庫『駅路』)

■応募方法

○中学生、高校生ともに1200～2000字程度の読書感想文を書き、応募用紙に添えて提出してください。

○手書き、ワープロどちらでも結構です。ただし全体の字数がわかるよう応募用紙に1行の字数×行数を記入してください。

○原稿は自作で未発表のものに限ります。なお応募原稿はお返しいたしませんので、必要な場合はコピーをおとりください。

■応募締切 平成18年11月7日(火) ※消印有効

■応募先 〒803-0813 福岡県北九州市小倉北区城内2-3
松本清張記念館 感想文コンクール係

■選考 松本清張記念館内の選考委員会により選考します。

■発表

審査結果は、12月下旬頃、本人と学校に通知します。

最優秀賞、優秀賞の受賞者には、表彰式を行います。

なお、入選の結果や受賞作品を記念館刊行物等に掲載することがあります。その場合、著作権は松本清張記念館に帰属します。

■賞品 (受賞人数等、変更の場合もあります。)

○最優秀賞(1人) 《モンブラン》万年筆

○優秀賞(中学の部…1人)(高校の部…1人) 《モンブラン》文具(未定)

○佳作(中学の部…3人)(高校の部…3人) 記念館グッズと図書券



イラスト:山藤 章二

編集・発行

松本清張記念館

〒803-0813
北九州市小倉北区城内2番3号
TEL 093 (582) 2761
FAX 093 (562) 2303
http://www.kid.ne.jp/seicho
制作 (株)エディックス

- 開館時間 午前9:30～午後6:00 (入館は午後5:30まで)
- 休館日 年末(12月29日～12月31日)
- 観覧料 一般/500円(400円) 中・高生/300円(240円) 小学生/200円(160円) ()は30人以上の団体
- アクセス JR:小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分
ら徒歩5分(バスをご利用いただく便利です(小倉城・松本清張記念館前下車)
車:北九州都市高速、大手町ランプより5分

第9回

松本清張研究奨励事業募集

募集要項

- 対象 ①松本清張の作品や人物を研究する活動
②松本清張の精神を継承する創造的かつ斬新な活動(調査、研究等)
※上記①②の活動で、これから行おうとするもの。ジャンル、年齢・性別・国籍は問いません。ただし、未発表に限ります。個人または団体も可。
- 内容 入選者(団体)に200万円を上限とする研究奨励金を支給します。
- 応募方法 今後取り組みたい調査・研究テーマ等の内容が具体的にわかる企画書、予算書、参考資料(様式は自由、ただし日本語)を、平成19年3月31日までに応募してください。

※詳しくは記念館までお問い合わせください。

2005年度・ドラマ化された清張作品

2005.4.20	「渡された場面」	テレビ東京
2005.7.2	「黒革の手帖スペシャル」	テレビ朝日
2005.10.21	「黒い樹海」	フジテレビ
2006.1.12～3.9	「松本清張 けものみち」全9回	テレビ朝日
2006.2.21	「松本清張スペシャル・指」	日本テレビ

編集後記

新北九州空港が3月16日に開港しました。早朝便、深夜便を利用すれば日帰りで東京から北九州の旅を楽しむことができます。記念館にもお越しください。(中野 吉明)

